

第2回 宗門教学会議

近未来社会の危機

—人口減少、超高齢化社会と宗教の役割—

開催日 2014(平成26)年2月13日

二〇一四年二月十三日、宗門教学会議が開催された。本年度のテーマは「近未来社会の危機——人口減少、超高齢化社会と宗教の役割」。外部有識者として、鬼頭宏氏(上智大学教授)、金子隆一氏(国立社会保障・人口問題研究所副所長)、富野暉一郎氏(龍谷大学教授)、宗門からは清岡隆文氏(中央仏教学院講師)にご登壇いただき、各氏の専門分野から貴重な提言がなされた。

さて、「人口減少・超高齢化社会」とは、一体どのような状態を指すのだろうか。また、そのような社会がなぜ形成され、どのような問題を引き起こそうとしているのか。今後、我々はそうした変化に対して、どのように対応し、考えて行動すべきか。そして、この危機的な状況において、宗教はいかなる役割を果たしうるのか。

私たちが生きるこの社会にとって、また宗門にとって極めて重要かつ切実な課題である「人口減少・超高齢化社会」について、宗門教学会議では、熱心な議論が行われた。

今回は、宗門教学会議の速報として、金子隆一氏と鬼頭宏氏のご提言内容について、総合研究所研究員が報告する。

「宗門教学会議」総長挨拶

宗門教学会議は、宗門が当面する諸問題、宗門内外から提起される現代的課題及び種々の問題等について、先端的知見を有する有識者から、動向の把握分析と提言をいただき、「宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、より良い社会の創造のためにいかなる役割を果たしうるか」、宗門の方向性を考えてゆく会議として位置付けられております。

さて、本日のテーマは、「近未来社会の危機——人口減少、超高齢化社会と宗教の役割」(人口減少問題)であります。わたくしの記憶の中では、「人口減少」が議論の俎上(うま)のほるようになってから、すでに何十年もの時間が経過しているように思いますが、ここ

数年、より切実な問題として顕在化してきたように思われます。

それは、お寺のある各地域の事情においても同様です。浄土真宗本願寺派の場合、西日本の農村部、山間部に多くの寺院が存在しています。その中には、「限界集落」と呼ばれる地域も含まれていきます。そうした地域では、今、まさに起こっている切実な問題であるのですが、日本社会全体が、この「人口減少社会」への突入について、真正面から向かい合っているようには、残念ながら感じられません。

仏教には「縁」という言葉があります。この言葉は、ただ、同じ時代に生きる者どうしの関係を表す言葉ではありません。過去に生きていた方々、

未来に生きる人々との関係も、この「縁」という言葉は表現しております。なぜなら、過去に生きていた人々も、未来を生きていく人々も、私たちがとつながっている、すなわち「縁」の中にあるからであります。

本日の「人口減少社会」という課題は、未来社会において、より深刻な問題を引き起こす可能性のある課題です。確かに、「今」の豊かさも大切であります。しかし、それだけでは、将来に大きな禍根を残しかねません。未来について考えることは、「縁」の中で過去と未来を一緒に考えてきた、仏教者の重要な役割であると考えております。この課題に向けての一步を踏み出していくために、本日は、先方の貴重なご意見をいただきました。ありがとうございます。なにとぞ、宜しくお願い申し上げます。

第一の提言

人口減少社会を迎える日本の課題と挑戦

— 将来推計人口でかいま見る近未来 —

金子隆一氏

金子隆一氏からは、「人口減少社会を迎える日本の課題と挑戦——将来推計人口でかいま見る近未来」というテーマのもと、

- (1) 日本の人口動向の概観
- (2) 人口減少社会・少子高齢化への道
- (3) 人口変動をもたらす課題と処方

という三つの具体的な提言がなされた。以下は、その提言内容から(1)日本の人口動向の概観と(3)人口変動をもたらす課題と処方について、まとめたものである。

日本の人口動向の概観

◆人口減少・少子高齢化を見る

「今後の日本の人口減少」には二つの

②少子高齢化について

日本は出生率が世界的に最も低い国の一つであり、平均寿命の伸び率は、逆に世界で最も突出している。この「少子化」「高齢化」のため、世界でも際だって高齢化率の高い国となりつつある。

歴史を紐解くと、確かに江戸時代の人口も四〇〇〇万人程度であった。ただ、人口構成が現在とは全く異なる。江戸時代の四〇〇〇万人においては、老年人口はごくわずかに過ぎない。一方、二一〇〇年には、二人に一人が高齢者となる。

現在、高齢者が毎年一〇〇万人ずつ増え、逆に15歳以上、65歳未満の「生産年齢人口」が毎年一〇〇万人ずつ減少している。日本の国を形作っている年金や社会福祉制度といった諸制度は、国民の約半数が青年であった一九六〇年代に形成された。そのため、生産年齢人口の割合が低下していく近い将来において、この制度は維持することが困難になると予想されている。

顕著な特徴がある。すなわち①「人口減少」と②「少子高齢化」である。このことはメディアを通して周知されている。だが、その変化の速度と性質については十分に理解されていない。

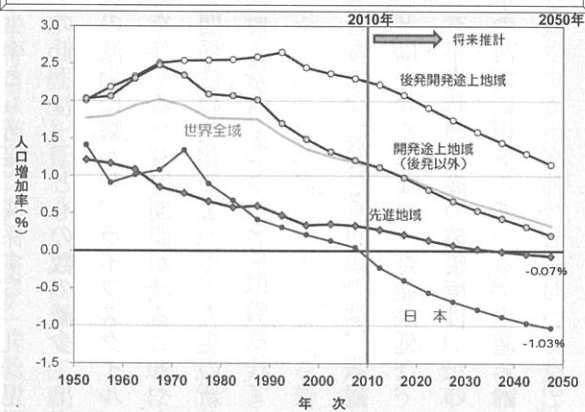
①人口減少について

現在の日本の人口は、およそ一億二八〇〇万人。予測では二〇六〇年には約八七〇〇万人に減少し、さらに、今から一〇〇年後の二二一〇年には約四三〇〇万人にまで減少するとされている(図1)。四三〇〇万人とは、現在の三分の一の人口である。日本はかつて、これほどの速さで起き、かつこれほどの規模の人口減少を経験したことはない。それどころか、世界全体を見渡しても、人類が一度も経

◆国際比較——日本は特別か？

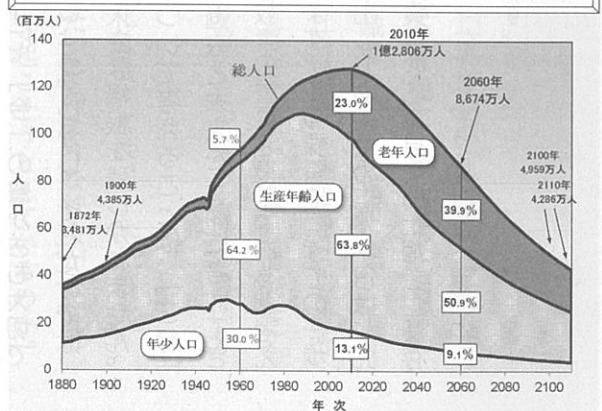
人口減少について、その速度、高齢化率の高さなど日本に特殊な面も見られるが、決して日本だけに起きている事態ではない。予測によると、先進国は二〇三〇年頃から人口が変化しない「人口停滞」から「人口減少」の局面に入り、開発途上地域も二〇五〇年頃以降には人口停滞局面に入るとされている(図2)。

図2 世界の人口増加率の比較 (1950~2050年)



資料: United Nations (2009), World Population Prospects: The 2008 Revision. 総務省統計局「国勢調査」
国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計出生中位・死亡中位推計)」

図1 日本の人口推移 (明治期~21世紀~2110年)



資料: 内閣府統計局, 総務省統計局「国勢調査」推計人口, 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計出生中位・死亡中位推計)」

験したことのないような急激な変化を、日本社会はこれから迎えようとしている。

近年、「子どもが減った」、「人口が減った」とセンセーショナルに報道されているが、図1で確認できるように、実際には歴史的な転換点に位置しているに過ぎず、急激な変化は始まったばかりなのだ。

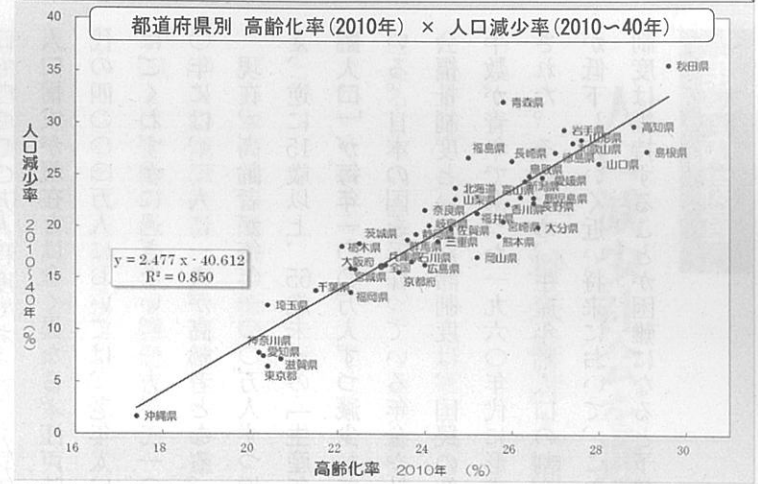
つまり、日本は「前人未到の歴史的苦境」を迎えようとしているのだが、それは近未来の世界の姿でもあるのだ。だから、世界中が日本の人口減少への対応に注目している。日本社会は「日本モデル」を構築し、未来の世界を切り拓く重要な役割を担っていると言えるのである。

人口変動をもたらす課題と処方

人口減少社会は、多くの変化をもたらす、社会にいくつもの課題を突きつける。「経済的」には、少数の働き手が多くの人を扶養しなければならぬ人口オーナス期の経済活動(オーナスは「負担」の意味)になり、働き手世代の負担が著しく増大する。

「地域性」に関して言えば、沖縄・東京・滋賀・愛知・神奈川といった地域以外は大きく人口が減少し、自治体が破綻することさえ予想されている(図3)。また、都市部は大量の高齢者を抱えることになり、インフラ・施設などの不足が

図3 高齢化が進んでいる地域では、今後の人口の減少が著しい



資料：総務省統計局「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）平成25年1月推計」

第二の提言

人口減少社会をいかに理解し、いかに迎えるべきか？

——人口文明史観の視点から——

鬼頭 宏氏

歴史人口学を専門とされる鬼頭宏氏は、「人口文明史観」という視点から、

以下の三点について提言された。

(1) 少子化、高齢化は歴史の必然である。

「ライフコース」（個人の一生の具体的な道筋）も変化する。平均寿命は90歳になる。結婚率、出生率の低さから、現在の若者の半分は、二世代の内に直系の子孫がいなくなる。「女性におけるライフスタイルの変化」

(2) 人口変化は波動（人口の波）として理解する。

(3) 少子化は克服することができる。

少子化、高齢化の必然性

豊かになれば出生率は低下し、同時に長生きになる。「人間は生物であるから、死なくなると生まなくなる」のは生物として合理的な行動である。したがって、豊かになると少子化、高齢化が進むのは必然なのだが、日本の場合、人口増加をストップさせるために、国策として人口の抑制が図られてきた影響も大きいという。

また、東アジア諸国は概して出生率が低い。これらの国に共通する家庭環境やジェンダー論、思想などが社会構造に影響を与えていると考えられている。

さらに日本の場合、夫婦共に働きながら、子どもを育てるための環境が整備されていない。また、女性の出産後の仕事復帰が困難な現状もある。こうした、仕

は出生率とも密接に関係する。乳幼児死亡率の低下は、子どもの数の減少、出産回数の減少に繋がり、ライフスタイルに影響を与える。育児期間が減ることや夫婦の関係性の変化によって、人生の新たな選択肢が増えてくると指摘されている。

もちろん、「高齢者問題」は、悲観的なことばかりではない。寿命が延び、一九五五年当時の65歳の健康度は、二〇一〇年の74歳に相当している。生産年齢人口が減少する超高齢社会においては、この高齢者の力を生かすための制度改革が必要となる。こうした変化と課題が生ま

れるからこそ、「どのような考えを持ち、どのように生きていくのか」という問いが、新しい社会の構築と切り離せない。すでに、高度経済成長期のような豊かさとは異なる「豊かさ」が求められる時代に入った。経済が「成長」しなければ社会は成り立たないという思考自体が矛盾を持つようになっており、環境問題も含め、「持続可能性」が大切な価値となってくる。新たな文明の段階に入る今、パラダイム変化と創意工夫・技術革新による文明の再体系化（＝日本モデル）が求められているのである。

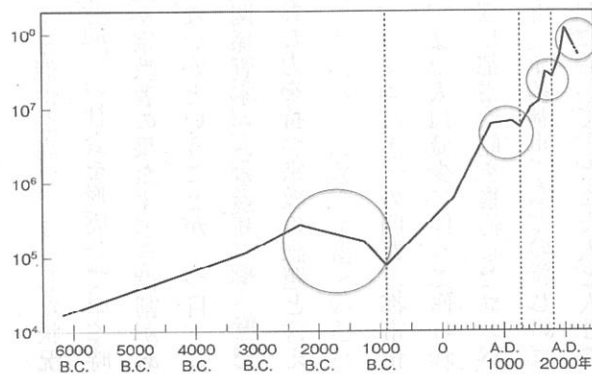
事と出産・育児を両立しにくい状況が出生率の低さをもたらしていると分析されている。このように、物質的な豊かさ、東アジア的社会構造、女性をとりまく社会環境といった要素から、少子化・高齢化は必然的に生じた。

人口変化は波動である

ところで、人口減少は決して未曾有の出来事というわけではない。人口変化は、図4のように、波のように繰り返されるものである。人口は、資源や食糧が不足するといった問題を社会が抱えるようになることと減少する。そうした時に、外部の文明から新しい技術や稲作のような新しい作物が導入されると生活様式が大きく変化し、人口が増加に転じる。やがて、それぞれの文明システムが完成の域に達すると、再び人口停滞が起こる。

日本の歴史を見ても、これまで四度の人口停滞期が存在した（図4）。最初は

図4 日本人口の波動的成長
人口減退は「未曾有」のできごとではない。



縄文中期であり、二度目は平安時代、そして三度目は室町時代から江戸時代にかけてである。これらは、いずれも文明の成熟期であった（図5）。そして、四度目の人口停滞期が、われわれが生きる二十一世紀である。

少子化の克服

人口停滞期が文明の成熟期であるなら

図5 人口停滞期は文明の成熟期

- 縄文中期
最も古い土器文化。豊かな狩猟採集経済。
- 平安時代
国風文化(藤原文化)・国風美術。和歌・かな物語の成立。
- 室町～江戸時代
食:三食制、豆腐、納豆、まんじゅう、ようかん、うどん、醤油、味噌、清酒、焼酎、味醂、茶、砂糖。
衣:木綿、小袖、襦袢、木綿足袋。
住:書院造、床の間、玄関、襖、障子、畳。
日本型農民、ムラ、都市の祭り(祇園祭等)、今日的な方言、地方名産。敬語法、礼儀作法、儒学的道徳、神道。市場、貨幣。
- 21世紀の日本文化とは？

所感

えば化石燃料から再生可能エネルギーへと転換を図ることによって循環型社会を実現し、地球環境を破壊せずに未来に手渡していくことが必要である。

また「少子化の克服」とは、日本人口の減少が将来にわたって確実な状況において、少子高齢化を防ぐということを感じない。少子高齢化によって引き起こ

される都市化・核家族化を前提にした新しい社会システムの構築や、高齢化によって非常に長くなった老後期間などに適合した個人の生き方の模索を内容とするものである。

ここに、宗教の役割がある。とくに、後者においては、積極的な発信が期待されている。

「人口減少社会」「少子高齢化」をめぐる議論は、宗門の課題のいくつかを抽出した。提言後の議論も踏まえて、「所感」を記しておきたい。当日の議論は、大略して、二つの側面から展開された。

一つは、お寺や、そこにいる僧侶・寺族の社会的な役割について。もう一つは、宗教の社会思想としての役割である。

寺院・僧侶の役割

人口が減少し、少子高齢化が進む社会においては、経済的な行政サービスは低

下していく可能性が高い。こうした状況の中、「共助」の社会を形成していく時に、寺院や宗教者の果たすべき役割があるのではないかと一つ目。これは社会関係資本(「つながり」や「信頼」など)を育む力を持つ宗教の課題と言えるだろう。

第二に、コミュニティの問題。都市化した社会、また人口減少に伴って作られる、中心部に都市機能を集約したコンパクトシティ(集約都市)などの新しいコミュニティにおいて、どんな人と人との

「縁」を作ることができるのか。そこに寺院や僧侶、寺族は、いかに関与しているのか。そもそも、新しく作られるコミュニティに、寺院は積極的に移動・展開し、参画していきけるのだろうか。

さらに、消えていく地域の問題。これは主として、富野先生から提言された。今後、いくつもの地域社会が消えていくことが予想されている。行政では「看取り」という言葉も使われるらしいが、人がいなくなっていく地域のケアを誰が担うのか。ここにお寺の役割があるのではないかと、というのが三つ目の課題。なお、この点については、現在でも、著しい過疎化の中で、地域の人びとを支えるために尽力されている寺院があることを、研究所の調査を元に報告した。

そして、第四に、公的、あるいは地域の子育て支援が弱く、夫の育児休業の出席率も非常に低い日本においては母親へのし寄せが強く、その問題の克服においても、十分に寺院や僧侶の役割があるという点。ボーイスカウト活動に参加さ

れている鬼頭先生から、宗門の青少年育成活動への評価がなされ、こうした活動が日本が抱える問題を克服する手立てになると指摘された。多くの幼稚園、保育園を抱える宗門寺院、また日曜学校や育児支援を実践している寺院の活動が、「人口減少」という日本社会の大きな課題に貢献しようという視点が有識者によって確認された。

宗教の社会思想としての役割

そして二つ目の宗教の社会思想としての役割について。

これは実に大きな課題であって所感の中にまとめざるには難しい。ただ一点だけ触れるなら、「宗勢基本調査」の浄土真宗僧侶の意識調査に言及されながら、「いのち」について発信して欲しいというメッセージが、鬼頭先生から投げかけられた。そのことが、新たな成熟した、自他共に豊かな社会を作っていくための力になると先生は論じられたのである。

「少子高齢化」とは、まさしく「生まれてくる命」と「老いていく命」の問題である。こうした命の問題に、私たちはみ教えから、どのようにアクセスし、何を発信していくことができるのだろうか。大切な思想的・宗教的課題をいただいたように感じられた。

(教団総合研究室長 藤丸智雄)

浄土真宗本願寺派総合研究所

<http://j-soken.jp>

※本文中では、超高齢社会に向かっていく社会を「超高齢化社会」と表現している。